坪田譲治全集

1

新潮社

坪田譲治全集 第一巻

印刷 昭和五十三年一月十五日
発行 昭和五十三年一月二十日
著者 坪田譲治（つぼたじょうじ）
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京（〇三）二六六―五一一一 業務部
二六六―五四二一 編集部
振替番号 東京四―八〇八
印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社
定価 二八〇〇円
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
© JÔJI TSUBOTA Printed in Japan 1978

坪田譲治全集 第1巻 目次

短篇小説（大正8年〜昭和9年）

森の中へ　八
白い石　一六
村に帰るこころ　二二
何を砕かむ　二三
正太の馬　二三
正太の故郷　二九
コマ　二四
子供の憂鬱　二五
雷雨　二七
ピンと雞　二一
壺　二六
正太弓を作る　二六
田園小景　二八
正太樹をめぐる　二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

友情　九三
枝にかかった金輪　九五
父の記憶　一〇五
マタメガネ　一一五
三輪車　一一九
虹　一二二
兄は樹上にあり　一二六
心村に帰る　一四六
雪という字　一五八
町から帰った女　一六一
葡萄の若葉　一六四
セキセイ鸚哥　一七三
蟹と遊ぶ　一七八
遊ぶ子供　一八三
善太の四季　一九四
キャラメルの祝祭　二〇九

日まわり　二二六
激流を渡る　二三二
《補遺》
亡き兄の自画像　二三七
西方浄土　二四二
老人と子供と蟹　二四七
七月の夢　二五〇
樹の下の石　二五六
夕飯前　二五九
心の浜辺　二六四
＊
あとがき　坪田譲治　二六五
編集後記　二七一

（箱カット・中尾彰）

坪田譲治全集 第1巻（小説一）

正太の馬 他

森の中へ

声というものはいいものだ。胸の中に欝積しているものが、声と共に気体となって発散して行く様に思える。処が私は私が勤めている大学図書館で、一日中決して自分の腹の中からの言葉を出したことがない。それを聞いてくれる人もなければ、それを洩らす場所もないからだ。私はどんな人でもいいと思っていた。給仕であろうと、小使であろうと、私の言葉をすなおに聞き、すなおに受入れてさえくれたら。そして吾々の間に人間らしい交渉があったら。然しその様な人は一人もいない。みな冷酷で神経質だ。他人の言葉や動作を凡て石の様に冷く弾き返して置いて、その言葉や動作から素早く多数の欠点と弱点とを見出すことのうまい人間ばかりだ。彼等の眼に会うきりで、私の柔い心の言葉は腹の底で凝固してしまう。決して彼等に人間らしい感情を正直に示してはならない。彼等はそれに侮蔑の鞭を酬いる。それなら私の窓の下に、風にそよぐ若葉の柿の樹でも立っていたら、それはどんなにいいことだろう。私には柿の樹を見ると、直ぐに子供の頃が思い出される。そしてその躍る様な無骨の枝ぶりや水に濡れてでもいる様なその若葉の色が、柔い子供の頃の言葉を以て私に話しかけてくれる。そうしたら私のこの洩らす処のない欝憤も、柿の葉にそよぐ清らかな風の様に、サラサラと吹き晴らされて行く様にも思われる。

然しそんなものが何処にあろう。私の窓からは何方を見ても、四角な窓の列らんだ二階や三階の灰色の高い建物が、陰欝に狭い地上を見下して立ち列らんでいるばかりだ。そしてその間を錆びたトタン屋根の廊下がウネウネと曲り曲って、覚束なげに続いているばかりだ。然し午後三時頃迄は一時間毎にそれらの建物の窓が開く。そこから沢山の学生が首をのぞける。そして煙草の煙を吹いたり、高らかに笑ったり、高らかに話合ったりして騒ぐ。またその間は廊下にも多くのものが行き交いすれ交う。それ故その時だけは大きな物憂げな動物の様なその建物も、さながら生きてでもいる様に日を浴びて立っている。然しその時が過ぎると、それはまた鈍い無数の硝子の眼を私の方に向ける。そしてその廊下にも人の影が消える。すると何本も何本も続いている細い廊下の柱がげじげじの足ででもある様に私に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は見えて来る。

私は何処に私の友達を求めたらいいのだろう。人間らしい互の交際を求めたらいいのだろう。アーと云う大きな一つの吐息でさえも、それを唯おだやかに聞いてくれる人があったら。

私はその廊下を伝って、教室の方に行ったことがある。それは夜勤の晩食を食った後、少しばかりの休みの時であった。そこには大小幾つもの四角な室が列らんでいて、その前を真直ぐな廊下が通っていた。私はその一つの室を開けて内に入った。そこには人もいないのに、さながら生きてでもいる様に無数の椅子が机に向って反り返って列らんでいた。私はその一つに腰を下した。そして休みたかったので、机の上に頭を伏せた。暫くそうしていると、如何だろう、その室の空中にゲラゲラゲラと嘲笑う様な声が起って来た。私は驚いて頭を上げた。椅子が笑っている。そうだ。人間のいない空虚な室で、椅子が歯のない口を開けてガタガタ震える様に身体を動かせて哄笑していた。私はそこを飛び出した。

然しまたその後久しくたってから、私は極めて小さな教室に入って休むだことがある。その時私は何時の間にか、私の前に古ぼけた黒の詰襟を着て、髪の延びた青い顔の青年が、悄然として立っているのに驚いた。私は斯うしてもうその後この教室を訪ねない。白い土埃で汚れた此等の淋しい教室は、とても私を休ませてなどくれる処ではない。

それなら私を心安く受け入れる処、それは一体何処にあるのか。三百人も人の入れる二つの閲覧室と、五十万冊の書のある四階の書庫と、三十人からの人間が働いている六つの室、それらの中に、私を受け入れてくれる処は一つもないのであろうか。私の友達になってくれるものも、処も、唯の一つもないのであろうか。ない。それは一つもない。ないばかりでなく、凡てのものが私に威厳を示し、その上私の奉仕を迫っている。然しそれはその筈なのだ。私は図書館の使用人だから、図書館全体が私の主人だ。そこにある椅子一つ、ドア一つでさえ、決して私の自由にはならない。もし私が一つを嫌って、

「これは嫌だ」

と云って、それに手をかけないとしたなら、私は図書館をやめなければならない。然し私は図書館をやめたきりではすまない。私は次いでに現代の社会から出て行かなければならない。何故なら硝子戸一つでさえ図書館システムの一である。システムの一を拒絶するものはその全部を拒絶するものである。処が私は、図書館が現代社会のシステムの一であることを知らねばならない。それ故、私が硝子戸一枚と思っていたのは異っていた。その後にどんなに大きなものがあるかを知らなかったのだ。

私が色々なものに自分の本心を示そうと思ったのは、そ

れは大きな間違いだ。社会というものはシステムで決して個人の自由意志を許さないのだ。もし私がその一つにさえ意志の自由を示そうとするなら、社会全体にそれを表明しなければならない。そして社会に勝ち得た後、私は初めて硝子戸一枚を自由にすることが出来る。然し私が神の様に強い人間でない限りそんなことをしたら生命が危くなるに極っている。

館長の控えている室の前には黒い一条の綱が張ってあった。そこは四つの事務室と二つの閲覧室とに通ずる廊下の交叉点になっていたので、その黒い綱が閲覧室と事務室との境界線の縄張りになっていたのである。処が私の事務室は二階の閲覧室の側にあって、此縄張りから云えば、閲覧室の方に入っていたのである。だから私はそこ迄来ると、いつもその綱の下を潜らなければならなかった。頭を腰の辺迄下げて私はソーとその下を潜ったのであったが、その度に館長は、その席から硝子戸越に私の方を眺めていた。そこで私は、彼のために頭を下げる様な気になったり、時には彼の眼から隠れたいと思うて、遠くから頭を下げる様な気になったりした。然し一度も私はそこを平気で通り得なかったのである。

細い黒い粗末な綱であった。然しそれは人の心を圧するに充分であった。誰でも、その綱を知らずして、それに打っつかって、それを切ったりするものは一人もなかった。もしもまた誰でもそれに打っつかりでもしようものなら、何か尊い厳かなものにでも触れた様にびっくりして、素早くそこを飛のき、切れはしなかったかと、目をみはるのであった。それ故それは一年中休暇以外一日の欠もなしに、ビーンと空中に張り切って、図書館全部の秩序がそれ一つに懸ってでもいるように威厳を示していた。然しそれのみではない。その綱はその威厳を以て、閲覧室と事務室との間の空中を断ち切って、そこに侵すことの出来ない見えざる壁を作っていた。そして内と外との空気の色を変えていた。閲覧人にとっては、それから内、事務室の方は未知の国の様な気さえしていたのである。だから閲覧人の多くは、綱を越して好奇の眼を見張り乍らもその綱に近よりさえしなかった。

処がある日のこと、私は二階から階段をドンドン下りて来て、その下を潜ろうと思って、不思議の感じで立止った。見れば、ない。黒い横に引かれたいつもの線がない。そこは空虚な空間になっていた。綱ははずされて無残に下に落ちていた。然し何故だろう。私はそこを潜らないで通れる様に思えない。そして目に見えない壁が私に打っつかる様な気がした。何かが私を押し返し弾き返す様なことが思われた。だが、私はそこの綱を跨ぎそこを横ぎった。鉄の壁の様なものが私に打つかることと思っていたのに、それは

垂れ幕の様に軽く私を過ぎ行かせた。余りの軽さに私の身体はフラフラした。余りの自由に私は支えるものを失って、穴の中へでも落ちて行く様な感じがした。けれども、私はまさしくそこを通り過ぎた。

細い弱い綱だけれども、綱一条に私はこんなに圧しつけられていた。然しその力は図書館という一つのシステムの力だ。私はそれの無くなった自由と軽さとを楽しむため、二三度そこを行き返り通って見た。

その綱の奥には二つの階段がある。私の室へはそれを昇らなければならない。どんなに私が疲れたからと云って、それは決して降りの階段となる様なこともなければ、一つの階段となる様なこともない。それは十段ばかりで巾一間に長さ二間の中段になっている。そこに昇りつくと、左に曲って五六歩歩き、また左に曲って十段ばかりを昇るのである。

「何故左に曲らなければならないんだ。私は煩さい。真直ぐに歩きたいのだ」

斯う私は考えたことがあった。然し決してそうは行かない。階段についていた堅い樫の大きな欄干は無理矢理人をねじ曲げて、どうしても思う様に通らせないでは置かない様な力を示している。然しもし私がそれでも真直ぐに行くならば、彼方には白い固い壁が冷かに立っている。

「これをお前は破ることが出来るか」

壁は斯う云っている様に思えた。然し私にだって壁を破るのは何でもない。然し壁を支えている大きな力はやはり社会を今のままで動かない様に支えている強い力の網の目だ。それはまた図書館という一つの建物の中にも現れている。朝から晩迄私を左に曲らせ、右にねじ曲げ、或処では頭を下げさせ、或処では腰をかけさせる。そして階段を上下する足の数さえ間違えさせては置かない。そうして私が朝図書館の玄関に手をかけると共に、嫌でも応でも寸分動作を誤らない機械の様に動いて、二階の机の前に引きずられて行く。そして私はペンを取らされる。

「ペンこそ私のものだ」と斯う私は訳もなく考える。然しやはりそれも間違いだ。非常な注意と非常な努力とを集注しなくては、小さい弱いペンでさえ中々動いてはくれない。そんなに私が苦しい努力をしているのに、何うして私がペンを自由に使っているなどと云うことが出来よう。私こそペンに使われているのだ。

私の机は少し傾いていて、ペンを何う向けて置いても、いつもコロコロと転げ落ちた。そして落ちる毎に、私は四つの机の下に、真中の奥の方に這い込まねばならなかった。そして土埃の白くついたペン軸や、インクの落ちた床の上を、紙で丁寧に拭わなければならなかった。然しそんなことは小さいことだ。それよりもペンが如何なる場合にあっても、頑固に自分の個性を固守して、決して私に譲ろうと

はしないことの方がもっともっと彼の力を示している。彼は黒いつやつやしいセルロイドの軸に、金の鋭い牙の様な光った尖を有ている。そして彼はどんな時にあっても自分のその形を全力を尽して守ている。或時私は積重なっている書の間に挾まれて、頭を少し覗けていたペンに気づかないで、その方に書を取ろうと手を延した。すると私の手の甲に、牙の様なその尖は少しの容赦もなく突き入った。その時何故ペン尖は、私の押す力に対して押されてくれなかったのだ。彼はまるで何かに襲いかからんとして全身に力をこめて居る猛獣の様に、身体が砕けるかでなければ彼方の肉を破ろう、と云う様に身体をすくめて突き入って来た。柔い私の皮膚、私の肉はどんなに彼に対して怖れ、どんなに彼に対して無力な自分を守ろうと震えたり縮んだりしたであろう。然し彼は例えこれが私の咽喉に向ってでも容赦はしない。彼は決して私の願には従わないのだ。そして平常は細いかすれたり、にじむだりし易いその尖を、大事に大事に私に使わせている。こんなに彼には妥協がない。彼の要求は凡て私の方で入れているのだ。それでもペンは私のものなのだろうか。いやいや、何にもかも、凡ては個性を固守し、存在を主張しているのだ。

私は下宿に帰って、毎日大きな溜息をつく様になった。そうすると、或日は黒い煙の様な息が吐き出された様に思えることがあった。また或日には白く濁った息の出て行くのが感じられた。然しその息と共に腹の底の鬱憤が空中に発散して行くのであった。そして私の心はいつとなく晴々と落付いてくるのであった。処が溜息をついてもついても、発散しきれないものが何時の頃からか心の内に溜って来た。それはドス黒いモヤモヤした煙の様に思えたり、ドロドロした泥の様に思えたりした。私はアーア、アーアと二つ宛に区切った呻声を上げた。幾度もそうやっている内知らぬ間に眠ってしまった。眼がさめたらもう朝だった。斯様な日もあったのである。

処がある日のこと、その黒いものの溜ってる様に思えた腹の底から不思議な力が醗酵して来た。それは決して溜息や呻声で収まるものではなかった。下腹に圧さえつけても圧さえつけても、非常な力で爆発し相になってこみ上げて来るものであった。もし私がその力の爆発するに任せたら、私はどんなことをやるか解らない。

閲覧台の上に突立って、沢山の閲覧人の方を向いて一人の男が叫んでいる。

「オー、オー、オー」

彼の目は醜く飛び出し、大きく開かれた暗い口にはギザギザの鋭い白い歯が生えている。その間から紅い舌が見える。

「オー、オー、オー」

閲覧人が総立ちになって、ガヤガヤ騒ぎ乍ら、彼の方に

集って来る。それでも、彼は腰を曲げ、口を前方に突き出して、尚叫びつづける。後からは沢山の事務員の手が、彼の足をとり、着物を摑んでいる。叫んでいるのは私だ。こんな光景が私の頭に描かれた。

二階の事務室の戸が乱暴に突き開けられ、階段にドドドドと急激な足音がする。館長室の戸が壁に打つかってドーンと響きを立てる。一人の男が両手を前に突き出して、館長の方に猛進している。館長はびっくりして、一寸その男の顔を注視したが、突作の間に、その男の意志を知ると狼狽えた様に後の窓に手をかけた。そこをその男は一突きに突き飛ばす。と館長は戸棚の側面に打っ突けられて、中腰になり乍ら倒れまいとヨロヨロしている。そこをまた男は両手で突き飛ばす。館長は彼方の戸棚に突きやられて、転げ乍らそこの硝子戸に手を突き込んで、もう動くこともようせず、不思議相に男を見ている。そこへ飛びかかった男は身を屈めて館長の耳に喰いついた。そしてそれを喰い取った。それから彼は血の滴る耳を、全身の力を集めて嚙み砕いた。熱した歯や口に耳は冷い感じを与えた。彼は一度耳を取出し、それを円めて、また猛獣の様にがつがつしている大きな奥歯の間に入れた。

その男は私だ。私にはそんな光景が空想された。それのみではない。時によると一番大切な原簿の上で、ペンを持っている私の手に目茶苦茶な力が突き入って来る。私はペン尖を折る程その上を搔き廻し相になって、急いで原簿をふせなければならなかった。或時など、私が階段の上迄行くと、突然それを一度に飛び下りたい力に囚われた。内にある力が私を前に突き出し、私の身体は今にも空中に浮きかかった。

私は自分で自分が怖くなった。そしてそんな心持を無言の口に閉じ込めるため、一層私は陰欝にならなければならなかった。

処が私は次第に自分の身体にさえ窮屈を感ずる様になった。解らないものが私を縛っている様な気がし出した。まず図書館では、私は規則正しく、しかも複雑に曲りくねった狭いコンクリートの廊下を毎日同じ様に繰返し繰返しコツコツと歩いている様な気がしたが、下宿に帰ると、狭い六畳の周囲の壁は固く私を閉じ込めた。そればかりでなく、時にはその壁が段々狭まって、息づまる程に私を圧して来る。薄く脆弱な壁が、その時はどんなに厚く固くドッシリとした重みを有ていることだろう。そんな時私は窓を開けて広い外の空気に息をつく。そして部屋の中をアチコチ歩いたり、手足を色々に動かす。すると幾分自分の自由が感ぜられる。

然し昼間はどんなにかして過ぎた。が夜、永い夜は私にとって実に堪え難い時であった。私の両まぶたは閉いでも閉いでもハッとつなぎの手を離す。そして磨いた鉄の様な

目の玉がその間からのぞき出る。仕方なく私は闇の中を見つめている。それは長い長いしかも細い危険な綱渡りの様なものであった。私は闇の中で、腹一杯になっている力と、私の自制力との押しくらをやり乍ら眠りの来るのを待ていた。もしその爆発する力が勝ったら、私は何をやるか解らないのだ。それはまるで高い処から飛び下りる様に私には思える。だから私は、それをじっと圧しこらえて、単調な細い長い綱を、もう一分、もう二分という様に心の中で渡って行くのであった。その内、力は綱の単調に疲れる。そして何時の間にか眠りに落ちる。然しもうその時は朝に近くて眠ったと思う間に、直ぐ目が覚める。休まらない私の頭は石の様に凝って、何に対してか解らない様な腹立しさは腹の中に一杯になっている。

けれども私のこんな心も、うまく空想の手にあやされ、なだめられることもあったのである。私は斯う考える。

「広い広い野原がある。見渡す限り青い麦の畑だ。その上にはまた広い広い見渡す限りの蒼空、月が白く照り、風が安らかに涼しく吹いている。私は麦の上に浮いている。まるで水の上にでも浮いている様に。しかもどんなにしても落ちないばかりでなく、グタリと身を投げ出しても安定を失わない。すると風が私を吹く。私はスルスルと麦の葉の上を滑る。スルスルと何処迄も安らかに滑て行く。ゆるやかな傾斜を下に、それを上に、川を渡り、丘を越える。丘の上から見える遠い彼方の空は夜が明けたと見えて、晴やかな広々とした蒼空。私は何処迄も高く低く滑て行く。森の上を、青葉の梢の間を、或は流の上を水と共に」。これは何時の間にか私をスルスルと滑て行く感じの中に引き入れる。そして私はやがて眠りの中に落ちている。

その夜は私にはこんなことを空想するのさえ煩さかった。唯眠れないイライラする眼を天井に向けていた。見れば天井が非常な重みをもって、私を圧している。私の身体を動かすどころか、息もつかせない様な力がそこにはこもっていた。私の窮屈と息苦しさはそのための様に感ぜられた。

「あの天井を取り去れば、上には広々とした蒼空、軽い晴晴しい空気」私はそう思った。それから寝返りをしようと思うと、足を上から押さえつけているものがある。それは蒲団だ。蒲団迄私を動かせない様に圧えつける。私はそれを蹴飛ばした。そして床の上に立ち上った。闇の中にジリジリする心をじっと堪えて、私は暫く立っていた。

「郊外へ行こう、そして広い空の下で眠ろう」これは私の頭から離れたことのない望みだったのだが、一度も果したことがなかった。然しその夜は斯う思うと、直ぐ汚い一枚の毛布を蒲団から脱いで、忍ぶ様にして下宿を出た。

都会から少し離れると、ねじ伏せられていたものの自由を得て起き上った時の様に、私の内にある力は嬉しさに躍

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com